継承。そして警鐘

Succession and warning bells

大津梅の造花物語

夏の風物詩である「大津地蔵祭」。今年も祭りは盛況に行われ、人々を楽しませました。その地蔵祭の中で「梅の造花」を目にした人がいるかもしれません。

私たちは、大津町の伝統芸術「梅の造花」について知っていることは、意外に少ないのではないかと思います。

参勤交代時に江戸への土産物として重宝されていた「梅の造花」。昔は「大津梅の造花か山鹿灯籠か」と言われるほどに有名だったものの、今では知る人は少なくなり、作成者も減り、素晴らしい文化の一つが衰退しようとしています。

昔から大津町に住んでいる人も、新しく町にやってきた人も知っていてほしい物語。

今月は梅の造花にまつわるお話を紐解いていきましょう。

第1部 始まりと終わり

岡田家と造花

地蔵祭と造花

寛永三年（1626年）の日吉神社寿賀廼舎日記（すがのやにっき）にこう記されています「鶴口地蔵、松古閑地蔵祭、生花、造花、色々造り物にて存外賑合い申し候」。

これが梅の造花の最古の記述とされています。この日記に、鶴口や松古閑の地蔵祭で造花があったことが記されているということは、それより前に梅の造花は存在したと思われます。

造花の祖と伝えられる岡田家の岡田兵左衛門は、豊後国（今の大分県）玖珠郡小田村の出身で、細川忠利公によって一領一匹（郷士）に取り立てられ、芦北郡や熊本市に居住していたが、延享四年（1747年）7代目の兵助のときに合志郡御山支配役、大津両井手筋水方支配役となり、大津に居を構えます。岡田家は明治まで続き、明治維新後は現在の鶴口地蔵付近で「菊屋」という飲食店兼旅館を経営します。その屋敷内に祀った地蔵尊の縁日（8月24日）に造花を並べて披露したのが現在の「地蔵祭と梅の造花」の始まりです。

岡田家のだれが造花を初めに伝えたのかは定かではありません。しかし造花の「祖」であることは間違いないことなのです。そして、造花の文化は、上大津、松古閑、塘町筋へと大津に広がっていきます。

そして蓮草紙（つうそうし）との出会い

継承した安藤家の造花づくり

明治の末には、岡田家の弟子である安藤家の安藤又太郎（あんどうまたたろう）さんが造花づくりを広めます。

それまでは、造花の花は、文七紙（和紙）や羽二重（縦横に編みこまれた紙）を使用して作られていましたが、又太郎さんの弟である安藤同（かんどうはじめ）さんが台湾に行った際に『蓮草紙（つうそうし）』というものを見つけます。蓮草紙は、カミヤツデ（別名：蓮脱木（つうだつぼく））からつくられる紙で、水中花などに使われています。この紙は梅の花びらの丸みを豊かに表現でき、しかもコシが強く、年数がたっても紙の形が変化しません。

この紙を使用し、安藤又太郎さんは、花びらなど部品をつくった状態で皆に提供し、梅の造花を更に普及させます。だれでも容易に梅の造花をつくることができるようになったのです。

容易につくることができるようになっても、梅の造花は、地蔵祭においてその出来を競いあっていました。金賞、銀賞、銅賞と賞が設けられていたように、質の高い造花の作成には技術が必要だったようです。

しかし、その梅の造花にも、転機が訪れます。

昭和36年に安藤又太郎さんが亡くなってしまうのです。

蓮草紙（左）とカミヤツデ（右）。中にある芯から紙が作られます。

大津の梅が出す気品

前大津町史編纂室編集委員長
吉村昌之（よしむらまさゆき）さん

大津の梅の造花は、あまり文献は残っていませんが、長い歴史のある伝統工芸です。昔は、大津の女性は皆、梅の造花をつくることができたほど造花が普及していたそうです。とにかく大津の梅は気品があります。最近は、大きい造花を見なくなりましたので、大きい造花を見ることができたらうれしいですね。